



Title	『林栄一先生のご退官にあたって』
Author(s)	金山, 崇
Citation	大阪外大英米研究. 1987, 15, p. 15-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99098
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『林栄一先生のご退官にあたって』

金 山 崇

四十年と一口に言っても、考えてみれば、それは人が誕生して不惑の齢に達するまでの年月に当たる。この長い年月に亘って、林栄一先生は昭和20年代の最初より今日に至るまで、母校のため、英語学科のために、僅かな紙面では到底言い尽くせぬ程、色々の面で貢献されて来た。これは当該学科のみならず全学の過去、現在の関係者の等しく認めるところであることは疑いない。

先生は英語学科の大先輩である。大阪外国語学校英語部を昭和15年に卒業されたのち、九州帝国大学文学部に進まれ、英語英文学を専攻された。豊田實、中山竹二郎といった英語英文学界の先達に習われたようである。第二次大戦後は、帰国されて程なく母校に迎えられたのであるが、早くも昭和25年から26年にかけて、先生は難関を突破され、ガリオア奨学金による渡米留学生に選ばれ、英語学研究者のメッカであったミンガン大学に赴かれ、ケネス・バイク、チャールズ・カーペンター・フリーズらのもとで学ばれた。ここでの研鑽の成果を、先生は実習は言うまでもなく特に講義を通して当時の学生たちに披瀝された。私などは、当時まだ新しかった構造主義的考え方や phonemics(音素論)の講義を受けたのが記憶に鮮やかである。外事専門学校から外国語大学に昇格して間もない母校に本格的な学問の気風を吹き込まれた感があった。また先生は音素論の研究を次々と発表し、学会の高い評価を得られていた。昭和31年10月、三省堂発行の『記述言語学入門』(R. A. Hall, Jr. 著、鳥居、興津共訳)の「解説」に、大塚高信氏(故人)が、新言語学の標準的邦訳語の決定を計画され、林栄一、増山節夫両氏の助力を得ている旨が述べられているが、当時ミンガン大学から帰って半年ばかりだった私がそれを見て、母校のために誇らしく思ったことが忘れられない。大塚先生の主宰する「大阪英語学談話会」に参加された先

生が、論文や学会発表に加えて、より多くの英語の研究者、教授者、学習者を今日に至るも啓発し続けておられるのは、イェルムスレウの『言語理論序説』、ヨーアンセンの『音韻論総覧』を始めとする一連の翻訳、「英語学辞典」では研究社刊、成美堂刊の2冊、『新英文法辞典』（三省堂）、『英語慣用法辞典』（三省堂）『英語表現辞典』（研究社）といった日本英語学界での代表的辞典、及び高校用の一連の文部省検定英語教科書を通してである。外大で先生の教えを受けて英語学を志し、現在学界で指導的役割を果たすなど、活躍中の者は、50歳台から20歳台までざっと数えても50名には上る。これらのうちの有志が、先生の還暦を記念して、『英語と日本語』（くろしお出版）という立派な論文集を出したのも先生の人徳、学徳を示すものであった。その他、学外に対し、学究、教育者として及ぼされた影響は、推し量るべくもなく大きいと言わねばならない。

学内にあっては、市内上本町八丁目に校舎のあった頃、昭和30年代の終りには、学生課長として多々ご苦勞があった。また大学紛争の最中には、学生委員長として身の危険を省りみず働かれた話は未だ私の記憶に新しい。図書館長も一期お勤めになった。英国の Everyman's Library が書庫に入ったのもその当時であった。語学演練装置（L.L.）の設置にも大きな役割を果たされ、それが徐々に発展して、箕面へ移転の際には、今日のように立派なものが出来上がったのである。大学院創設に当たっても、先生の学究としての功績が大いに物を言ったことは想像に難くない。英語学研究論誌 *Nebulae* も先生の唱導で間もなく創刊され、今に続いている。英語学専攻の院生は皆、これを背景にして学界に乗り出していったのである。

片山忠雄先生の後を受けて英語学科主任となられてからは、雑用の多い、先生自らある時私に言われた「高等小使」（頭韻を踏んでいるのも面白い）として、語科の者がおよそべったりと先生に寄りかかっている（恥ずかしいが私もその一人どころかその最たる者であった）のを、いかにも先生らしく愚痴もこぼされずにお世話して下さった。片山、大井両先生を送り、フェリシー先生を送り、ベンダガースト先生を迎えてまた送り、内田、松田、向、斎藤の諸先生

『林栄一先生のご退官にあたって』

を迎え、病気のイングルズ先生の最期を看取り、繁雑で骨が折れたその後始末も一手に引き受けて終えられ、スターク、クーラスの両先生を迎えたのも皆、決して長くはなかった先生の主任時代の出来事であった。学長となられて、隣の研究室の名札がはずされた時の寂しさのようなものを思い出すが、何と言ってもまだ学内におられるのは心強かった。

だがその先生も、こんどはいよいよ、規定によって、学長の職を退かれる。われわれの身近な視界から外へ去って行かれる。が実は未だもってその実感が私には湧いてこない。で迷惑であったかも知れぬが、18歳の時から今日まで40年間、林先生との精神的、物理的ご縁が私にとつて一度だって途切れたことはなかったのだから、当然のことであろう。

私と先生との出会いは昭和22年の秋であった。こう書き出すと、あとは私個人の青春記のようなものになるので、これ以上は控え別の機会にゆずりたいが、ともかく、外大へ入り、卒業し、縁あって奉職するようになって、先生との接触がより実質的、直接的なものへと年を追って変って行った。私などは、教えを受けてもその学恩に殆どお報いした自信の持てない人間である。それのみか、反対に、色々お世話になりっぱなし、迷惑のかけっぱなしのようなところがあって、先生がお辞めになるこの時になっても、心中なお忸怩たるものがある。ともあれ、私が今日あることのそもそもの始まりが、40年前に先生の教えを受けたことにつながっていることだけは間違いない。私は幸せであったと思う。

万物流転。これは先生が昔授業中に引用されたギリシアの哲学者の言葉の主旨である。今のこの時に、この言葉の重みをひとしお感じるのは私だけであろうか。

先生は本当にお達者でいらっしゃる。小事に拘泥せず、大らかで、ざっくばらんで気取りなく、しかも肝心のところはきちんと押さえておられ、事に当たっては冷静沈着に判断される、というのが先生であろうか。先生のご資質をカリスマ的と呼ぶ人もある。5年間の学長生活を終えられて、これからは、最終講義に見せられた益々若々しい情熱をもって、好きな学問一筋の日を送られるであろう。先生にとって楽しい毎日が訪れるよう、またいつまでもお達者で、

金 山 崇

われわれ世の後輩に引き続き範を垂れて頂けるよう、心から願い、かつ祈るものである。